

植物防疫情報第7号

令和2年8月11日
岡山県植物防疫協会
岡山県病害虫防除所

モモせん孔細菌病の秋季防除を徹底しましょう

本年、本病が発生した圃場では来年の発生が多くなる恐れがあります。本病は単独の対策のみでは十分な防除効果が期待できず、体系的な防除が必要です。次作に向けて、秋季からの防除を徹底しましょう。

1. 発生状況

県病害虫防除所が8月5日に行った巡回調査によると、モモせん孔細菌病の葉での発生圃場率は71.4%と、過去10年のうち最も高くなっています（平年 38.4%）（図1）。

2. 防除対策及び防除上の参考事項

- 近年の本病の多発傾向は、前年の発生が平年よりも多く、台風等の風雨により病原菌が広範囲に飛散・感染し、越冬伝染源量が多くなっていることが影響していると考えられます。
- 本病の発生圃場において、秋季に当年枝の枝病斑（夏型枝病斑、図2）から飛散した病原菌は、枝の皮目や落葉痕などで越冬して、翌年4月以降に次作の重要な伝染源となる春型枝病斑を形成します。このため、**夏型枝病斑を除去し、圃場外に持ち出し埋設するなど適切に処分**することが極めて重要です。
- 越冬伝染源量を下げるため、9月上～中旬にバリダシン液剤5の500倍（収穫7日前まで、4回以内）またはスターナ水和剤1,000倍（収穫7日前まで、3回以内）を散布しましょう。さらに、9月下旬と10月上旬の2回、I C ボルドー 4 1 2（30～50倍）の散布を追加すると、越冬伝染源量の低下に一層有効です。
- 風当たりの強い圃場では薬剤だけでは防除効果が得にくいいため、防風ネット等の**防風対策の徹底**が重要です。

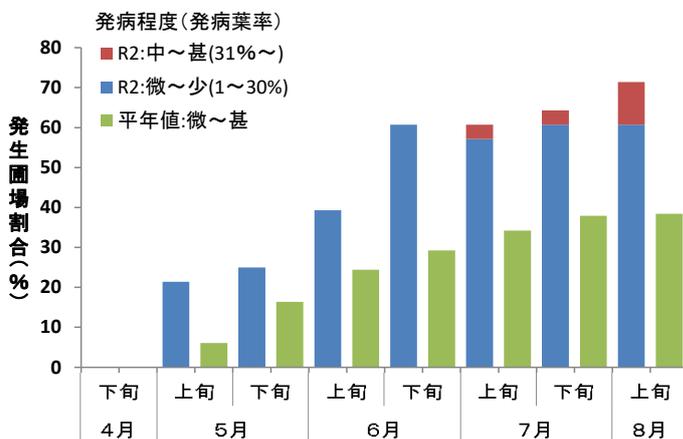


図1 本年の岡山県内におけるモモせん孔細菌病の発生推移
(岡山県病害虫防除所による巡回調査データ (7地点 28圃場))



図2 夏型枝病斑 (新梢)

農薬の使用に当たっては農薬使用基準を厳守するとともに、各農薬ラベルの注意書きやドリフトに注意するなど、安全・適正に使用するようお願いします。なお、収穫後の農薬使用は、次作（令和3年作）での回数のカウントとなりますので注意してください。

この情報は、岡山県病害虫防除所ホームページでも公開しています。
アドレスは、<http://www.pref.okayama.jp/soshiki/239/> です。

